

哲學研究

第十八號

第二卷
第九冊

ロツツエ 妥當說の由來

錦田義富

序說

一

第十九世紀獨逸哲學亞流時代の最大哲學者、ヘルマン・ロツツエの精細銳利にして示唆詩趣に富める思想は、現代哲學——特に新理想主義の哲學に對して鮮からぬ貢獻をなして居ることであるが、就中彼の論理學の基本概念たる『妥當』と云ふ思想が現今認識論上の論理主義に與へたる寄與と影響とは、蓋しその最も顯著にして且つ有意義なるものの一つであらう (Windelband, Die philosophische Richtungen der Gegenwart, 1911, S.

376. Lask, Die Logik der Philosophie 1912. S. 11 f.。論理主義の哲學は妥當説を基調として成立し之と起倒を共にする。初めて『妥當』てふ術語的表現を意識的に確定使用し、更には當の思想を核心として之を多方面より立證究明せる彼の『論理學』(System der Philosophie. I. Teil, Drei Bücher der Logik. 1874)は現代の論理派に對してカントに次ぎボルツァノと相並ぶ重要な思想源泉たる點に於て歴史的に有旨趣なりと云ふのみに止らない。妥當説を以つて苟しくも眞理の問題實在の問題を根本的に考察せんとする人の、必ずや精査沈潛せざる可らざる思想なりと信ずる私共にとつては、此書は又組織的にも大なる價值を有する者なのである。固よりロツツェは認識論を以つて哲學の窺見地と考へたのでも無ければ、又之を以つて形而上學に代り得る者と思ふたのでも無い。彼の全哲學體系に於て認識論に認められたる地位は、カントや新カント派の夫れに比して著しく低位にあるを否み難い。彼は屢々論理的に對して實在的、認識論に對して形而上學の優越を主張し、前者は却つて後者を前提し之を其不盡の源泉とする事を高潮し(Metaphysik. S. 81)進んで、*alle notwendigen Wahrheiten, denen wir das Seiende als etwas secundär. Hinzukommendes unterordnen zu können glauben, eben nur Natur und Konsequenz des Seienden selbst sind.* (Logik. S. 568)と喝破した。更に彼が當時の認識論——

生理心理學的認識論を嘲つた有名なる小刀研磨の比譬 (Metaphysik. S. 15) を思ひ合はする時は、偏に彼の論理的方面のみを重視尊重する現代論理主義者は、カントに還りボルツァノを蘇らす認識論的偏執に捉はれ、其好む處に即して彼を解し彼の眞義を逸したりと見られぬでもない。現に彼を以つて近代學者中最も斷乎たる最も危険なる認識論反對者となすコッペルマンの如き人さへある位である。(Lotze ist unter den Neuesten wohl der entschiedenste und... auch der gefährlichste Gegner aller Erkenntnistheorie. Koppelman: Lotze's Stellung zu Kant's Kriticismus. Zeitschrift f. Philos u. Philos. Krit 88 B. 1886. S. 1.)

然し他面彼の哲學はカント乃至ボルツァノの光に照らして解釋せらるることを是認するのみならず、カントよりも更に徹底的に出て、寧ろ大にボルツァノに近づける程に、其本質上認識論的論理主義的要素を多分に有することを看過し難いのである。

私は最初此歴史的一小研究を序論とし彼の妥當說其者の叙説を本論とする一文を草する心組で執筆したのであつたが、歴史の部分が豫想外に長くなつたのと、後者と切離してまさして理解に差支へることもないし、比較的獨立的意義もあると思ひ直して、先づ此方を茲に載せることとした。之れが完結すればロツツエ自身の妥當說を次で本誌に出す積りである。尙ロツツエの妥當說の中でも私の主要目標として居るのは彼の哲學の體系期と云はるる時期の思想に限るのであることをも併せて斷つて置く。彼の著作中最も多く利

用するのは次の三書である。便宜上以下引用の際略字を用ゐる。

System der Philosophie, I. Teil, Drei Bücher der Logik 1874.

herausg. von G. Misch. 1912(Log.)

” ” II Teil, Drei Bücher der Metaphysik. 1879.

herausg. von G. Misch. 1912. (Met.)

Grundzüge der Logik und Enzyklopädie der Philosophie 1893

5. Aufl. 1912 (Gr1.)

—

先づ彼の『論理學』を見る。事實の問題と權利の問題、心理的見方と論理的見方を嚴に區別することによつて認識論上の發生的心理主義模寫の實在論に手強く反對し(Log. Buch III. Kap. 1,3)認識の對象が内心理的主觀的思惟作用とも異なれば外超越的客觀的實在界とも別に、獨自の世界を形成する當體的妥當(Sachliche Geltung)即ち妥當する命題自體並びに其成素としての表象内容にして、夫は前二者の何れにも獨立無依に實存することを明白に主張したる點に於て(Log. Buch III. Kap.2)彼はカント批評哲學の眞髓を把握せるのみならず、これを一層論理的に純化することによつて、ポルツァノの論理的客觀主義(Logischer Objektivismus. Palégyi, Kant und Bolzano 1912. S. 21)に似

たる立場にさへ到達せるを發見するのである。勿論形而上學的關心も同時に強かつたロツェは、妥當界が内外の實在界より全然無依であるとは主張しない。妥當界の構成要素たる當體的内容及其間に成立する當體的連結 (*sachliche Inhalte, sachliche Beziehungen, ロツェは Beziehung と Verhältniss と區別して用ゐて居るから後者を關係と譯するに對して前者を連結と譯して置く*)の結局は實在界に其故郷を有し其一特殊相に外ならぬと説き或は一層切實に云へば夫は實在の發展相にして其 *Wesen* であるとも言ふて居る (*Log. S. 503 f. 525 f. 530 f. etc.*)。之は妥當が發生に於ては實在に依存すれども價値に於ては却つて其精華なりとの意であらう。何れにせよ認識論に對する形而上學の優位を説くとも見られるであらう。然し彼の大論理學一卷を貫く主要目標が出来るだけ認識の對象性を實在論的基礎より切離して確立し論理を形而上學や心理學より獨立せしめるに在ることだけは疑ふ可らざる事實である。

(第二編應用論理を除き第一篇純粹論理第三篇認識論何れの章に於ても此意向は明白に看取せられる)。

抑も夫れ自身に妥當する眞理の實存と之を把握し得る思惟の適能との二つは *die Anerkennung einer an sich gültigen Wahrheit, das Selbstvertrauen der Vernunft, Log. S. 487. 492. Vlg.*

(*Urd. 96 ff.*) 認識論と云はず形而上學と云はず、或は廣く經驗科學に於ても科學前の日常生活に於ても、言説のある處、研究の行はるる處、立場の何れにあり見方の如何を問はず、吾人の常に必ず假定せざるを得ざる根本前提であつて、如何程極端なる懷疑論と雖ども之ればかりは避くるに由がない。何となれば疑ふこと疑ひを解くこと否定すること、此假定を許さずしては不可能であるからである (*Log. Buch III. Kap. 1.*)。無假定を標榜する認識論の出發點、根本的たるを冀ふ哲學的探究の發足點も亦實に茲に存する。而してロツツェの犯さねばならぬ不可避の循環論法と稱するもの正しく之を意味するのである (*Log. S. 492, 525.*)。コッペルマンが之を以つてカントの無假定的認識論を常識の地盤に引下すものと難ぜる如きは、此説のカントを徹底せしめしより來る必然の歸結なるを悟らざるに基く由々しき誤評である (*Koppelmann, op. cit. S. 15-16.*)。ロツツェ認識論の課題は此二つの根本假定の想定よりして必然に規定される。即ち實在界に無依獨立なる當體的妥當——真理自體の實存と構造を確立闡明する認識對象の問題と論理的思惟作用の當該對象を把握する形式過程を探究解明する對象認識の問題との二を中心とする (*der Gegenstand unserer Erkenntnis und unserer Erkenntnis dieses Gegenstandes. Log. S. 13.*)。而して此二問題を解決するに當りては常に科學及生活

の提供する豊富確實なる素材に訴へねばならぬのであるが、併も之が原理標準を主觀的經驗や客觀的實在に求めてはならぬ、然すれば夫は直ちに心理主義模寫說となり、其結果認識の價值を其發生によりて説明し、論理的必然を心理的必然と混同して以て眞偽の絶對的異別を拂拭し去る經驗的相對論に墮するか、或は眞理の實存と其認識可能を拒む絶對的懷疑論に陥る外なき事を痛論して居る(Log. S. 533 ff., S. 490 ff.)。經驗の自律と原理の權能を確認せる點に於て、彼は先驗的方法の眞義に徹して居るのである。彼も亦自己の用ゐる方法に就て曰ふ、*Es ist im Wesentlichen die Ansicht Kants, die ich hier verträte, und von der die deutsche Philosophie nie hätte ablassen sollen*。(Log. S. 536, 531)。少くとも認識論丈に於ては彼は明白なるカント批評主義の遵奉者である。

妥當説も徹頭徹尾實在を無視すると云ふことは出来なす。An-Sich-Geltenは又必ず Hingehenであらねばならぬ補完として Ausser-Sichを必然に要求する(Lusk, Logik der Philosophie und die Kategorienlehre. 1911. S. 31)。即ち妥當は其本質上己れ自らに對立する實在を要求する、或は少くとも之を認容せざるを得ない。但し一般に妥當説が妥當説として存立し得る爲めには、夫れが要求し若しくは許容し得る實在の權能に自づから限度あること勿論である。ロツツェは先づ理性的普遍的妥當自體に對立し之れ

が適用され之に基いて改造さるべき素材として、非理性的特殊の表象過程を直接所與の實在として認めて居る。次に右の直接所與を改造して現實の認識を構成する主觀的思惟作用を妥當自體と異別して實在とよんで居る。(Log.S. 496 f., 505 f., 574 ff.)。此程度に於て實在の權能を許容する事は、妥當說として成立するに妨げない許りか或は必須であるかも知れない。然るに曩にも云へる如く、ロツェは是以上一步を進めて、殆んど自己の妥當說としての存立を危くする程の大なる讓歩をなして居る。夫れは彼が心理的經驗論に對して論理的アプリアオリと思惟の自律を擁護する爲に、一般實在物間に行はるる相互作用の一特殊の場合として外界の刺激に對する主觀(實在)の反動作用(spontane Rückwirkung)を説き來り、此反動作用の主觀固有の本性に基づく特異性によつてアプリアオリの基礎附けを試みたる如き著しき一例である(Log. S. 530 ff.)。斯の如きは價值の問題を發生の問題と混同し、形而上學的心理學的想定によつて認識論の問題を解かんとするものである。尤も彼も此主客兩實在間に行はるる動反動作用の如何にして行はれ如何なる過程をとるかの問題は、抑も是問題の答へ得るや否やの *Vorfrage* と共に今の場合必要なし、茲に切要なるは兩者間の *formales Verhalten* であると言ひ、又妥當が發生に於ては實在に依存すれども價值に於ては却

つて其本質をなすとも説いて幾分か右の矛盾を輕減しようとして試みては居れど、到底視點混亂の非難を免れることは出来なす。フッサールが einem unharmonischen Zwitter von psychologischen und reiner Logik (Husserl, Logische Untersuchungen 1901. 2A. 1913. I. B. S. 219) と難じた重なる理由は茲に存する。彼はロッツェの論理の猶規範的性質を有することと、其普遍的者が Fehler der psychologischen Hypostasierung des Allgemeinen に陥れることを指摘して居るが (Ibid. I. B. S. 219, II. B. S. 132) 何れも價值的視點を純粹に保持せずして之を實在的視點と混同せるを責めるのである。フッサールの難詰の當不當は暫らく別として、ロッツェはまだ充分にカントに存在する形而上學的及び心理學的偏執を捨てることが出来なかつたのである。然し彼が早くも千八百七十年代に於て、ヘルバルトの徹底せる客觀的論理主義の影響の下に、ライブニッツの可能界プラトンのイデア界をカントの光に照らして其妥當論的契機を顯揚し、逆にカントの妥當説を之によつて深化徹底せしめたる理解の深刻と識見の透徹を驚嘆せずには居られぬ。夫の有名なる認識論に向つての冷罵——小刀研磨の退屈なる仕事とか演奏前の樂器の調音にも劣る仕業とか云ふ冷評は、之を前後の文章と照合して解釋する時は、認識論一般に對する彈劾と見るべきに非らず、當時盛に行はれつゝありし生理

心理學的認識論に向つての抗議と解すべきであると思ふ (Met. S. IX)。一世を風靡した唯物論や自然科学的實證論に對抗する爲めカントを喚び起したのは寔に卓見ではあるが、批評哲學をヨハンネス・ミュラーの特種感官説に基けて立證しようとした程に幼稚なる時代であつた事を思はねばならぬ。アブリオリを精神物質的機制に基けたヘルムホルツやアルバート・ランゲの生理學的觀念論は更にも云はず、最も進んだと云はるるオート・リィブマンすら空聞の先驗性を物理學と生理學とによつて基礎附けた程に理解の淺かつた時代であつた事を記憶せねばならぬ。(Helmholtz, Ueber das Sehen des Menschen. 1855. A. Lange, Geschichte des Materialismus 1865. H. B. S. 3. O. Liebmann, zur Analysis der Wirklichkeit 1876. 3A. 1900. S. 39ff.)。カント學徒を以つて目せられるのみか、殆んど有ゆる大切なる點に於て彼のコペルニクスの回轉を理解しなかつたとさへ云はれたるロツクが (Koppelmann, opt. etc. S. 13) 却つて最もよくカントの眞意を獲るに近く今日の徹底せる新カント派を先取せるは偉としなければなるまい。兎も角之によつて彼の論理學の性質如何は想見するに難からずと信ずる。(ヘルマン・ローエンは早く千八百七十一年に名著 *Kants Theorie der Erfahrung* を出し居るが、現在私共の手にし得る千八百八十五年の第二版は *die vollständig erneuerte, Erfahrungstheorie*、

であるので、之を以つて直ちに第一版の性質を推知することは出来ぬ。が私は第一版にては心理主義的モメントが極めて強くは無かつたかと想像するものである。

Vlg. Natorp, Kant und die Marburger Schule 1912, Kantstudien XVII, S. 195.)

三、

轉じて彼の大『形而上學』を見る。論理學が久遠妥當の *Ideenwelt* を對象とするに反して、流動轉化の直觀界を對象とする形而上學は既に其發足點に於て全然異なる途を歩むもの (Met. S. 3 ff.) 而して妥當界の中心の $a+b=0$ として *Beziehung* なるに對して、實世界の中核が a と b との間の *Wechselwirkung* od. *gegenseitiges Leiden und Wirken* に在するを思ひ (Log. S. 550 ff., Met. S. 154 ff.) 更には思惟作用の兩者に對する意義も *sachliche Bedeutung*, *reine Bedeutung* と截然異別せられてあることを考ふる時 (Log. S. 570 f., Met. S. 158 f.) ロツツェが彼の論理學と形而上學との間に認めたる相違の可なり大なるを許さなむ譯には行かぬ。然しカントを通れる後の十九世紀獨逸唯心論の形而上學が同じく形而上學とは言ひ條、カント以前のそれと、深い認識論的省察を根柢とする點に於て著しく面目を異にする如く、一面獨逸唯心論の子であると共に他面自然科学の専門

家であり實證主義の反形而上學的潮流にも影響されたるロツツェの形而上學は、彼所謂 *die konstruierende Systeme* (Grd. S. 112) に比べて、更に遙かに細心謙讓の態度に出で、居るのである。彼の形而上學の課題とする處は、イデーに基いて實在を構成するのでも無ければ最高原理より之を演繹し來るのでも無い。夫は實在認識の *conditioni-nequa non* を究明すると共に、之を足場として更に一步を進め妥當と存在との窮極統一をも闡明せんとするのである。彼は先づ經驗を支配せんとする形而上學の他律主義に反對し、斯學は存在及生起を對象とすれども、何が存在し如何様に生起するかは偏に科學及生活の教示に待たねばならぬ、決して科學の法則的研究に干渉すべからずとなして、經驗の自律を主張する (Met. S. 91)。さればとて特定の科學を基點として其成果を一般化して形而上學を建設するが如きに至つては、更に大なる越權であるとして、暗に當時の生理的心理學を根柢とする唯心論的形而上學 (フエヒネル、ハルトマン) に反對して居る (S. 104)。夫れでは形而上學の課題は何であるか。彼簡潔に之れに答へて曰く、科學の提供する經驗を科學とは別の視點より考察し、夫れとは別の最高視點に導き行くべきである (S. 12)。「別の視點」と云ふは科學の無自覺に前提せる假定を意識的に闡明するの謂である。一層適切に云へば經驗を問題とするの意で

ある。彼此課題に定義を下して言ふ、Die Metaphysik soll nur zeigen, welchen allgemeinen Bedingungen das genügen müsse, von dem wir einstimmig mit uns selbst sagen dürfen, dass es sei oder geschehe (§. 19)。其如何に批評的精神の横溢し認識論的なるかを見るべきである。又科學とは「別の最高視點」とは妥當界と存在界との窮極統一を指すこと疑無い。彼の語を借りて云へば妥當的概念を生命とする實在あるべきものがあるものゝ根據たる意味の世界に移入せしめるのが形而上學最後の目的であるのである (§. 81 f., 60f)。

此問題是一般に妥當説に立脚する認識論の必ず當面しなければならぬ窮極課題であるが唯之が解答を認識論の範圍内にて試みるか、或は之を其權能外として形而上學世界觀の學に譲るかの一點に就て異見を生ずるのみである。暫く此點を除いて考ふれば、ロツツェの形而上學は所謂自然科學の論理的基礎を研究することを以て其一半の課題とすと斷じても不可なるを見ないのである。ミッシは彼の小形而上學 (Metaphysik 1841) に内在する認識論的力素を探究し、就中第二篇 Die Lehre von der Erseheinung がナトルプの Die logischen Grundlagen der exakten Wissenschaften 1910 と類似せるを指摘して居るが、若し小形而上學に對してしか言ひ得べくんば、大形而上學に就ては尙一層強き程度に於て類似を説かねばならぬであらう (Misch, Einleitung zur Lotze's

Logik. S. XXXV.。尙之に附加して西田先生の示唆されたる如くキンデルマンの範疇論がロッツェの形而上學に負ふ處多きを言ふことも出来るであらう(Windelband, Vom System der Kategorien 1900, Ueber Gleichheit und Identität 1910 西田先生——ロッツェの形而上學——『ロッツェ』第九十頁)。私を見る處によれば氏の反省的範疇と構成的範疇の區別及開展は、ロッツェの論理學第三篇第四章に説かれたる sachliche Geltung と reale Geltung の區別を基點とし、次章「先驗的眞理」てふ題下に數學及力學の成立條件の論ぜられたるを右の異別に基きて整理し、最後に形而上學第一篇本體論第二篇宇宙論を論理的に純化し、右の三部分を一體系に組織して出來上つたものに外ならぬと信ずる。他との類似や影響は如何にもあれ、彼の形而上學の中には今日の吾等より見て純然たる認識論的研究と思はるる部分の些少ならざるを發見するのである。左して理解の深いとは思はれぬハルトマンの批評が、不思議にも此點に於ては正鵠を得て居るのである(Hartmann Lotzes Philosophie. 1888. S. 53)。而して茲に留意すべきは、ロッツェの一般的條件或は觀念的形式 (ideale Formen) と稱するものが西南獨逸派の眼より見て純粹と思はれざるは、夫れが純形式的でなくて内容を具するものであると云ふ點である。此事は妥當界を成立せしむる論理的條件 (Rechtsgründe) にあつても同様である。此點

より云へば同じくライブニッツやヘルバルトの影響を強く受けたるフッサールが、新ロツェ派とも稱すべきキンデルマントよりも、却つてロツェに近きを見るのである。ミンシはキンデルマントが *Daneben hat in unmittelbarer Anknüpfung an Loize für die Erkenntnislehre den Kampf gegen den Psychologismus Husserl angenommen* (Philos. Richt. d. Geg. B. II. S. 376)と言ひ、尙ホルツァノの影響をも認め乍ら、ブレンタノとの關係を重視せぬを難じて居るがフッサールのロツェに對する關係は、兩歴史家の思ふよりも遂に一層密接である (Misch, *op. cit.* S. XVI f.)。但し本論文にては論理學に説かれた當體的妥當說を中心として考察し、形而上學にあらはれた實在的妥當の說には深入りしない積りである。

批評哲學の眞義を誤解してライブニッツ、ヴァルフの獨斷的形而上學に復歸したのであると云ふ人の誤解も (Koppelmann, *op. cit.* S. 13, f.) 一般に認識論に對する理解を持たなかつたと評する人の無識も (Höding, *Geschichte der neueren Philosophie*, Bd. II. 1896, S. 576) 上來の略説によつて大凡そ辯駁し得たものと信ずる。之れより進んでロツェ妥當說の源流を探つて見よう。

本論



現象と本體、表象と實在との形而上學的、二實在説に代ふるに、實有と妥當、經驗とイデオとの認識論的、二世界説を以てするのが妥當説である (metaphysische Zweiweltliche-identheorie iarsus erkenntnistheoretische Zweiwelttheorie)。夫は生滅流轉の時間空間的直觀界に對立し却つて之が對象的實存を可能ならしむる根據として、普遍久遠の理想的非實在的價值界の嚴存と權利とを主張するものである。詳細の點に至れば學者各其説く處を異にすること勿論なれど、其根本思想に於ては自づから融通する點がある。斯説の共通特質と思はるゝものを約説すれば次の如くである。第一に懷疑論に對して道德及知識の客觀性を擁護すると共に、此客觀性を客觀的實在と相即する實在論を以つて支持すべからざるものと難ずる。されば妥當説の破新門としては、相對主義や實在二界説に對する銳利にして徹底的なる批評を見るのを常とする。心理主義や模寫説に伏在する内面的矛盾や難點は、殆んど剩す處なく指摘糾彈されて居るのである。ソフィストに對するプラトーンの論難、ヒュームに對するカントの抗

辯の如何に深刻にして、抜根的なるかを思へ。第二に右と直ちに關連して問題提出の逆轉が行はれる。實在問題よりも價值問題が中心とされる。即ち物の本性如何を問はずして物に就ての眞理を問ふのである。物と物の眞理とは、一が時間的生滅的なるに反して他が永遠的恒存的なるの點に於て全然類を異にする。一層適切に表現すれば、客觀が客觀性の問題に對象が對象性の問題に置換へられるのである。之れカントのコペルニクスの回轉の眞義の一半である。而して妥當説は少くとも之れを基點として成立する。カント以前の妥當説にあつては、此正しき問題提出及解答が容易に他の實在論的視點と混入し未だ純粹なる相に於て保持されなかつた。カント以後の獨逸唯心論は妥當説を根柢として出立し更にそれ以上に出て、妥當より實在を演繹し來らんと企てた。現代論理派の努力は、第一にカントの眞精神を復活して價值問題を實在問題より切離して之を純粹嚴密に考察し、次に實在の領域を出來るだけ縮少せしめ價值の權限を能ふ限り擴大しようとするにある。第三に知識及道德の客觀性の基礎が普遍的者に求められる。個性的變化的直觀的なる實在界に對して、之を基礎附くる妥當界は一般的不變的概念的である。ヘラクライトスとバルメニデスによつて提起せられたる轉化對恒存の論争を、現實對理想の問題に

轉釋して解答を與へたるプラトーン及カントの新舊イデア論は、正に妥當說の頭目である。事實的經驗的なる存在に對する必然的先驗的なる普遍的者は又可能的者である。如何にも妥當自體は其理想的必然性に於て永遠自足するでもあらう。然し眞理を欣求し善美を愛欲する吾人の意思が之を承認し之に服従するに非ざれば、即ち夫れが實現され個性的に體現さるゝに非ずしては、吾人に對しては實在しないのである。夫の中世哲學者が或は *essentia* を *existentia* と區別し或は普遍概念を神に於ける *conceptus mentis* と説き又ライブニツが神の内なる無限必然の可能世界の實存を主張せるは妥當の本質の一面をよく洞見し得たものであると思はれる。普遍的可能的者の世界は即ち關係の世界 *system* の世界であらねばならない、或は關係又は體系の *Rechtsgründe* であらねばならない。此點よりして妥當說に立脚する人の判斷論は、定言判斷よりも假言判斷を重んじ、前者を後者に還源しようとする傾向が強い。茲にライブニツの深さを思ふと共に更に之を開展して凡ての眞なる判斷の本質を *Frage* に對する *Ja* oder *Nein* の *Entscheidung* と斷じたヘルバルトの鋭さを想はずには居られぬ (Leibniz, *Nouveaux Essais: Livre VI. Chap. 11. P. 379. Herbart, Einleitung in die Philosophie S. 94. Sämtliche Werke. Ed. I.*) 第四に妥當界は實在界に對してテレオロギヤの關

係に立つ。An-Sich-Gelten は Hingelien とならねばならぬ、Für-Sein-Gelten とならば置かない。夫れが個人的主觀の對象者となり直接所與の實在に關係する時直ちに規範的當爲の本質を發揮し來るのである。眞の普遍的者は特殊の Rechtsgründe である。原理は存在の Muster である、イラーは經驗に對して Methode である。現代の新カント派はプラトーン、カントに存する此一面を就中よく發揮して居るのである。最後に、從つて認識作用の論理的本質が構成にありと見らるゝに至るのである。思惟の職能は妥當を存在に實現するにある。然し存在は妥當説の立場より見れば對等の權利を以つて對立するものに非で、妥當の實現せらるゝ爲めの資料たるに過ぎない。存在は妥當説にとつても所與である、然し此所與は『更に高き所與』即ち原理に基いて撰擇され連結され或は更に一步を進めて夫れに全然同化されねばならぬ生地素材である。かくて所與は解決を要求する課題となり、かくて思惟の綜合作用創造作用が説かるゝに至るのである。此方面も亦現代論理派のよく宣揚せる點である。而して此五つの特質は又實に吾ロツツエ妥當説の核心をなす處のものである。

さて妥當自體が非存在的理想的従つて又或意味にては極めて主觀的のものであり乍ら、併もよく個人的氣隨と時間的變轉とを超越し普遍必然の客觀性を確保する

とは、今日の吾人にとつても依然として大なる驚異の對象であらねばならない。抑も人は如何にして斯くの如き非實在の實存を明覺するに至るであらうか。私は妥當の實存を覺悟せしむる因縁を討ねて重なるものゝ大凡そ三つある事を發見した。第一は道德的法則である。『あらねばならぬことなくして併もあるべき』の要求と、あるべきに非ずして併もある『處の現實との對立杆格は道德生活の前提である。善の理想、義務の意識は感覺的時空的存在を超越し却つて之が自己の命法に従へられん事を嚴として要求する。存在ならぬ當爲、現實ならぬ理想の權威と尊嚴とは道德的命法に於て最も純粹に體驗される。 *Du kannst, denn du solst* —— 是程痛切に價值自體の嚴存に眼を開かしむる者はあるまい。而して善のイデアは己れ自ら實在性を有せずして併もよく凡ての他のイデアを實在せしむる力を有すと説けるプラトンの體驗も、亦斯くの如くであつたに違ひ無いのである。第二は論理的概念及數學的對象である。是等は何れも一面極めて主觀的である。何を關心の當體内容とし如何様に分離結合を行ふか思惟の自由選擇である。對象を如何に定義し如何なる屬性を賦與するか數學家の隨意のやうに見える。而して其歸結を追ふとき新奇なる成果、意想外の結論に達すること稀れでない。思惟の自由創造は此方面に最も顯著に

あらはれる。然るに他面夫は思惟の如何ともなし難き客觀性を有するものである。如何にも對象の認定、視點の撰取は自由でもあらう。併も一度對象の確定され視點の樹立せらるるや、夫は内面的必然を以つて發展し來り思惟は唯々之を承認しその迹を辿るばかりである。此奇異なる二面性は容易に其非實在的妥當の實存を認知せしむるに至るのである。數理に就て深い理解を有したプラトーンやライブニッツ、論理に對して鋭い洞見を持つたヘルバルトやボルツァノが超越的意味の世界を確實に把捉し得たのも偶然で無いと思はれる。(上に言ふ二面性に就ては Royce, *The World and the Individual* 1899. Vol. I. p. 212 ff., Windelband, *Vom System der Kategorien*. S. 48 ff. に秀れたる叙述がある)。第三は自然科學的概念及法則である。是等は實在に對して妥當すれども直ちに之を以つて實在に擬せんには幾多の困難の生ずること、既に中世に於ける實在論對唯名論の論争によつて知らるる如くである。近世法則概念を先取したプラトーンのイデア論、存在は賓辭たる能はずと喝破したカントの批評哲學(*Kritik der reinen Vernunft*. heraus. v. Valentiner. S. 316 f.)は此點の深い洞察にも基いたものなのである。而して吾ロツツェの妥當説も亦如上の三つの省察に動されて成立するに至つたものと思はれる。彼の客觀的價値の論、當體的妥當の説、及實在的妥當の論は之

れに相應するとも見られるのである。(勿論因縁の此三者に悉されず、又夫等が一々隔別的に働くものでもないことは辨ずる迄もあるまい)。

妥當説を樹立するには主觀から出發するものと客觀から發足するものとの二つが考へ得られる。カントは主觀的妥當説の首唱者であり、ヘルバルトは客觀的妥當説の創始者であり、而してロッツェは(不完全乍ら)兩者の綜合を企てたのであると云ふのが私の主張したいと思ふ要點である。カントを以つて主觀的妥當説の首唱者と云ふには異論はあるまい。否一層適切に云へば一般に妥當説は彼を俟つて初めて樹立されたと斷言して差支ないと思ふ。彼の批評哲學が有ゆる種類の妥當説の開展し來るべきモメントを包藏すると云ふ點に於て——彼以前にも妥當説の説かれざるに非ねど、夫は常に之に反對の實在論者要素と結合してあらはれ未だ純粹妥當説たるに至らず、今日ブラトーンやライブニッツの妥當説の尊重せらるるは、之れカントの光に照らして彼等を轉釋し深釋せる結果なりと云ふ點に於て、——而して一見彼の正反對に立つ如く思はるる客觀的妥當説も、其實カントの洞見に基いて其以前の形而上學を論理化し、逆に之れによつてカントを開展することによつて初めて生れたるものにして、既に其成立の根源に於て彼を豫想せるもの、而して一度彼の視點

を閉却する時は直ちに客觀的實在論に墮する虞ありと云ふ點に於て——何れの點より見てもカントは妥當說一般の第一人者である。(茲に云ふ意味にてホルツァノのカントに負ふ處あることはバラギト既に示唆して居る Palágyi, Kant und Bolzano, S. 60。客觀的妥當說の容易に模寫主義の實在論に轉化する危険ありとの意はリッケルトのラスクに加へた鋭い批評によく説かれてある Rickert, Gegenstand der Erkenntnis, 3 A. 1915. S. 288 ff., 337 ff.)。客觀的妥當說の創始者をヘルバルトと云ふのに對しては異議が起るかも知れない。普通にはホルツァノを以つて之に擬することとなつて居る。如何にも彼の徹底的にして精細を極めたる Wissenschaftslehre が客觀的妥當說の最も豊富にして有力なる想源であると云ふ主張には異存はなし。又 ein in die Logik übersetzter Leibniz とよばれることにも同意する。然し Die Metaphysik des Leibniz ver wandelt sich bei Bolzano in eine, objektive Logik, wie sie bislang in der Geschichte der Philosophie unbekannt war (Palágyi, op. cit.) との立言に對しては斷乎として反對せざるを得ない。有ゆる意味に於て實在と獨立し主觀に無依なる超越的意味の世界と純論理的に確立したと云ふ點に於て——ライブニッツのモナドロジに内在する客觀的妥當說のモメントを遊離せしめ其形而上學を論理化したと云ふ點に於て(此轉釋の關鑰は謂ふ迄もなく

カントにある——而してボルツァノが事實此洞見に多大の敬意を拂つたと云ふ點に於て(第六七節參照)——客觀的妥當說の第一發聲者たる榮譽は之をヘルバルトに歸せねばならぬ。最後にロツツェのカントに負ふ處多きことは最近の研究によつて大に明らかとなり、最早コッペルマンやヘフディングの妄斷に左膽するものもあるまい(朝永先生——ロツツェの史的位罫「ロツツェ」第三十四頁以下)。獨りヘルバルトとの關係に至りては、たとひロツツェ自身の斷乎たる抗辯を言葉通りに受取らざる迄も、尙彼の妥當說の如何にヘルバルトの夫れと切實なる關係に立つかの點に於て充分認められで居らぬと思へ(Vlg. Misch, Einleitung. XIII. f. Falkenberg, Herm. Lotze S. 40 f. Zeitschr. f. Philos. u. Ph.-Kr. 150B. 1913)。然るに抑も妥當とか價值とか云ふ學語の使用に於て——モナドロジョーを批評法の光に照らして論理化すると云ふ洞見に於て——而して其論理學の中心觀念たる妥當自體(當體的妥當)の說に於て——ロツツェのヘルバルトに負ふ處の大なる之を否定すべく餘りに顯著である。固より彼をヘルバルト學徒の一人に數ふことは謬りである。彼は恐らくカント學徒として目せらるることも潔しとしないであらう。彼の目ざす處はヘルバルトの如く飽迄も意味の世界の超越的妥當性を確保し乍ら、カントの意識一般の深き思想を活かすことによつて、客

觀的妥當說と主觀的妥當說とを綜合する一層高き統一的見地に立たうと云ふのにあると思はれる。此意向は彼が妥當自體と認識作用との關係に就ての見解を討ぬる時容易に看取せられるのである。(此點は後にも論及するが其詳細は改めて彼の妥當說を叙述する別文に譲つて置く)。

之を要するにロツツェ妥當說の直接源泉は、第一にカント、第二にヘルバルト、而して第三はライブニツツであると言ふに歸する。私は是より進んで是等三人の妥當說の要旨及其關係をロツツェに結附けて略説し、最後にロツツェによつて提起されたプラトロン新釋に論及し、古代及中世に於ける妥當說の淵源——ロツツェに對しては間接源泉——をも併せ討ねて見たいと思ふ。

五

妥當說として見たるカント哲學の核心はアプリアオリと云ふ概念によつて表現することが出来るであらう。夫れではカントはアプリアオリを如何なる意味に使用したのであるか。夫は先づ現實に成立せる認識即ち科學の認識をば純粹的と經驗的——普遍必然性を有するものと然らざるものとに區分する、原理を意味する。先天

的認識とは普遍必然的認識の謂である。而してカントは此區分をば更らに分析判斷と綜合判斷の區分に結附け、分析判斷は矛盾律に基くが故に先天的論理的なれども知識を増加するものに非ざればとて之を形式論理に譲りて問題外とし、知識を擴大することを特色とする經驗判斷即ち綜合判斷について、更に之を先天的と後天的とに區別し、先天綜合判斷を以つて彼の批評的研究の當體とした。從來事實的偶然的連合に過ぎぬと思はれて來た經驗判斷の中にも普遍必然性を要求する判斷の存在することを看破した點に既に彼の偉大が窺はれる。然し先天綜合判斷の認定は批評哲學の所與即ち解答を要求する問題たるに過ぎぬ。『如何にして先天綜合判斷は可能なりや』と云ふ第二步の問題提起に於いて彼の先驗的方法の眞面目が躍如として顯現し來るのである。彼は認識の普遍必然性を成立せしむる基礎を問ふのである、眞偽てふ評價を可能ならしむる標準を尋ねるのである、認識を認識たらしむる *Rechtsgründeod. Gründe apriori* を究めるのである。之を經驗に求めても徒勞である。經驗の眞偽の尺度は經驗ではあり得ない。事實の普遍妥當性は事實には基けられない。經驗ならずして併も經驗を可能ならしめ、事實に非ずして併も事實を必然的ならしむるものは何であるか。夫れは經驗の *conditio sine qua non* である。カントは

之を時間空間の直観形式と純粹悟性概念即範疇とであると云ふ。綜合判斷即ち經驗をして普遍必然的ならしむるものは實に斯くの如きアプリアリに外ならないのである。此時アプリアリは認識の形式を意味し之れに對して内容は後天的であると云はれる。眞僞無差別の感覺的内容は形式的アプリアリに盛らるることによつて眞なる認識となるのである。容易に氣附く如く此場合のアプリアリは第一の場合と少しく異なる意義に用ゐられて居る。第一の意義にては一般認識を二つの異なる種類に分つ區分原理である。第二の意義にては凡ての認識を組成する力素原理である。此兩者は根本に於ては歸一點あれども其適用の仕方にて必ずしも一致するものでない。其何れかを徹底せしむる時はカントの妥當説は著しく面目を改め來るのである。カントの妥當説は先天的認識の先天的根據を時間空間及因果律等の形式に發見するだけには止まらない。彼は進んで是等の *Rechtsgründe* の窮極の根據として *Ich dau ke* 即ち先驗統覺作用意識一般を説いた。普遍必然性對象性の最後の根據は超個人的自覺に求められたのである。約めて言へばカントのコペルニクスの回轉の眞義は、第一に經驗的知識の中に普遍必然的知識の存在すること、第二に其普遍必然性の根據を先天的形式に求め、最後に其先天的形式を自

覺の統一作用に基かしたと云ふ三點に存すと云ふことが出来るであらう。後の
 妥當説の種々相は右の三點の各々に對し又其間の關係に對して補完修正を加ふる
 ことによつて發展し來つたものと見ることが出来るが茲にはヘルバルトの客觀的
 妥當説之を止揚力素とするロツツェの主觀的妥當説が、右の三要點に對して如何なる
 關係に立つかを指摘するに止めて置かう。

曩にも言及せる通りアプリアオリに就ての考方が第一點と第二點と不齊合なる點
 ある爲め、カントが實在界に對立すと見る妥當界に二様の解釋を容れる餘地がある。
 第二の立場に立脚すれば、苟しくも認識である限り即ち眞理の把握である限り、皆そ
 の根抵にアプリアオリを持たねばならぬ。言ひ換へれば凡て形式に盛られたるもの
 でなくてはならぬ。此時實在界は即感覺的内容を意味し、妥當界は即純粹形式の世
 界である。此見方よりして第一の先天的後天的認識の區分を見る時は、普遍必然的
 認識は雷にカントの先天綜合判斷及先天分析判斷には留まらない。彼の後天綜合
 判斷と稱するものも、夫れが眞なる限り、たとひ偶然的特殊的事實の判斷にても依然
 として先天性を要求するものと云はねばならぬ。此花は赤いと云ふ知覺判斷も、夫
 れが眞である限り、當然妥當界に其 *Rechtsgrunde* を有すと主張しなければならぬ。

従つて其權利根據も彼の説くだけでは不足するし、尙又之に論理的修正をも施さねばならぬ。斯くて妥當界 \parallel 形式界、實在界 \parallel 感覺界の見方を徹底せしむる結果は、第一に先天綜合判斷の領域の擴大、第二に *Reichserwide* の増加、而して第三に其權利根據の修正である。例へば先驗論理學を先驗感覺論に先立たしめ、時空の直觀形式を論ずる前に思惟の一般形式を研究するが如き之れである。此等の三點は孰れもカントの第二の立場を徹底せしむることより來る必然の歸結に外ならない。

轉じてカントの認識を先天的と後天的とに區別する第一の立場に立脚して見る。此時妥當界は純形式の世界でなくて内容的なる無意味の世界となり、之れに對する實在界は同じく内容的なる無意味の世界となつて來る。先天的認識とは嚴密なる普遍性必然性を有する認識との謂である。今此普遍必然性の意義を考へるに、夫れは勿論多くの個人主觀に共通に承認されるとか、或は或主觀が心理的必然を以つて認知するとか云ふ意ではない。誰が何時考へても或は誰も考へぬでも永遠に實存し普遍に妥當すとの義であらねばならぬ。『*transcendens*』と云ふカントのあげたる先天綜合判斷は實に斯る超時間的超個人的超人間的實存性を確保する眞理である。たとひ夫れが或時には眞理となり或時には然らず、或人には眞理であり或人に

は然らずとするも、其の變轉は個人に存し人間界に見らるるのみであつて、此故を以つて眞理の變轉を云ふことは出來ない。T+5||12の認識は人間に依存すれども、此命題其者は久遠のイデアの世界に嚴存する。さればカントの云ふアプリオリ||普遍必然性を徹底せしむる時は、彼の立場にあつても、彼の所謂先天判斷は必ず眞理自體と其認識とに分裂して來なくてはならない。或主觀がT+5||12を認識すると云ふ事と此命題のあらはず眞理自體とは嚴に區別して考へねばならぬ。斯くて妥當界は内容を具する眞理自體、妥當する命題自體の世界と見らるるに至るのである。而して妥當界に於ける成素としての内容——妥當する命題自體を構成する表象内容や概念内容も亦、妥當界の一員として其超時間性人超個人性超作用性を享有すると考へねばならぬ。カントも亦既に *Begehrte a priori* を説いて居る。かくて第一視點に立脚する時、其アプリオリを徹底せしむることよりして、眞理自體、妥當する命題自體と概念表象自體を説かねばならぬに至るのである。今此立場よりしてカントの第二視點のアプリオリを見る。命題自體を基礎附くる *Rechtsgründe* はカントの云ふ個々分離的なる形式的範疇でなくて、矢張り *Sätze a priori* でなくてはならぬと見るのが自然の見解であらう。(ラスクは之れに反して眞理自體の根據は依然形式でなけ

ればならぬと説いてフッサールの *Wesen* に鋭き批評を下して居る。之れによつて見れば超越的内容的眞理を許しても其權利根據は必ずしも實質的に解する必要のないことが分る。然しさう見るの自然なることはラスクと雖ども許すであらう、*Last*、*Logik der Philosophie*, S. 40 ff.)。而して此見解はカントも亦承認し得る處である。彼の *Synthetische Grundsätze des reinen Versta-* des は即ち之に相當するものなのである。約めて言へば第一の立場を徹底せしむる結果は、第一に眞理自體と其認識即ち對象と作用とが異別せられ後者は實在界の一部に墮して來る。第二は眞理自體の構成要素として概念自體表象自體も亦妥當界の一員となる。第三に眞理自體の權利根據は矢張り實質的眞理自體にして前者に比すれば一層普遍的なるものと云ふ事になる。更に進んでは表象自體にも權利根據が求められることもならう。之れに對立する實在界は眞偽の別の未だ生ぜざる無意味(反意味ではない)のもの、妥當界を分有することによつて眞となり得る作用及び所與の世界となるであらう。カントの先天判斷の作用の方面と後天綜合判斷とは正に斯くの如きものと見られなければならぬ。茲にも妥當界はカントの説けるよりは遙に擴大し來ることが知られるのである。

上來は第一第二と夫れ夫れ別々に開展せしめて見たのであるが、更に此兩者を結付けて考へる時は色々の立場が生じて來る、夫れによつて種々なる妥當説の發展し依る所以も理解し得ると思ふ。第一を實質的視點とし第二を形式的視點とすれば兩者を結付けて考へるにも其主とする處に従つて二様の立場を生ずることとならう。ヘルバルト、ロッツェのとつた方針は實質的視點を主として之れに形式的視點の歸結を結附けるにある。其結果は如何うなるであらうか。第一に作用と異別せられたる眞理自體の領域の擴大である。此花は赤い、此赤色があると云ふ如き判斷にても眞理としての命題は超越的妥當界に屬するものと見られるのである。之れに必然に相應するのは實在界の領域の縮少である。即ちヘルバルトにあつては die Entscheidung einer Frageとしての判斷は超越的眞理自體であつて、其作用の方面が實在の領域とされる。ロッツェに就て云へば der an sich gültige Satzが前者で、作用と此命題の素材 (der einzige uns gegebene Stoff) としての變轉無常の感覺は後者に當るのである。第二は眞理自體の要素としての表象自體が作用を超越する妥當界の一員と見らるることによつて、超越的意味の領域は更に擴大される。ヘルバルトの das Gedachte, Vorgeestellte, ロッツェの Vorstellungsinhalt, Empfindungsinhalt を作用と峻別して其超時間性超主觀

性を力説せるは此義を表はす者である。既に感覺にも作用と對象とを區別するに至れば實在の領域は一層減少すること勿論である。第三に一般に眞理自體及表象自體の實在界に對する關係は其の *Muster, Norm* となるのであるが、右の眞理自體と表象自體の *Rechtsgründe* は如何であるかと云ふに、カントの夫れよりも種類に於て數に於て増加すると共に大に整理修正さるる事明らかである。而して眞理自體にあつては、より普遍的眞理自體がより特殊的眞理に對して根據となるに相應して、表象自體の *Rechtsgründe* も普遍的が特殊的に對する關係に求められる。ロツツエが赤色一般の根據として色一般を説けるは此意であらう。ヘルバルトは此點について充分なる説明を缺いて居れど、彼の立論の仕方より推せば茲に歸着すると思はれる(第六節參照)。而して何れも先驗感覺論の前に先驗論理を置く點は撥を一にして居る。

カントの第一視點即ち實質的立脚地を主として彼の妥當説を開展せるものとしてのみ見てもヘルバルト、ロツツエの妥當説の著しく客觀的妥當説に近きことは一目瞭然である。其基く處を考へるに、作用及主觀の排斥にあると思ふ。彼等の共通前提は、認識の客觀性を純粹に確立する爲めには認識作用及認識主觀を捨象して考察せねばならぬと云ふにある。何故に作用や主觀の參與を拒むかと云ふに、斯くせでは

再び心理主義相對主義に墮するの外なく、やがて之れ批評哲學の自殺であるとするに依るのである。而して斯くの如く純粹に嚴密に認識對象を樹立しようとする時、必然當面し來るは、カントにあつて最も大切なる論點と思はるる先驗統覺作用意識一般の問題である。カントの主觀的妥當說と云はるる重なる理由の一つは、認識對象の窮竟根據を超個人的自我の自覺作用に基けたのにある。然るに眞理の超作用性超主觀性を高潮し來る結果は、やがて先驗統覺作用や意識一般をも對象の世界、論理の世界より放追し終らざれば已まざるに至るのである。言ひ換へればカントの第一及第二の論點を第三の論點より切り離し、前者のみを保留することによつて普遍必然性を嚴密純粹に擁護する企が自然に生れて來るべき筈である。而して此大膽なる根本的修正を初めてカント哲學に加へたのはヘルバルトである。茲に彼の徹底せる客觀的妥當說の産れて來る根源がある。而して吾ロツェのヘルバルトと袂を分つ分岐點も亦茲に發見されるのである。彼が對象論の殆んどヘルバルト、ポルツァの夫れに接近し乍ら、終に主觀的妥當說の第一義諦を捨つることを肯じなかつたのは、或は不徹底と見られるかも知れぬ。然し私の見處では彼の眞意はもう一層深い處に存する様に思はれる。細説は別文に譲るとして一言にして悉せば、對

象界を徹頭徹尾主觀に無依ならしむる時は對象認識の問題が解けなくなると云ふことを看破したのである。而して意識一般は之を正當に解すれば妥當的意識にして實在的意識と見る可きに非ざるを想へば (Windelband Principien der Logik. S.53.) 立論の仕方心理主義的なる點はあつても、之が爲めに彼の意向を看過してはならない。彼の目ざす處は實にヘルバルトとカントとの綜合にあると想はれるのである。

(第四節末尾參照。)

夫れではヘルバルトは何故にカントの意識一般を退けたのであるか。カントの意識一般や先驗統覺作用は、之を人間的意識實在的作用と解してはならぬのであるが、カント自身之に就ての言説は極めて多義的にして、人間的實在的(心理的)と見ることも出来る部分がある。而してフヒテ以後の大唯心論者は皆此意識一般を直に宇宙原理、實在創造の力と轉釋した。ヘルバルトは斯の如き主觀を以つて認識對象性の原理とすることは、やがて眞理を人間的相對界に引下し、克服せんとする當の敵たる實在論心理主義の軍門に降る所以であると考へたのである。更らに別の方面より見ても同一歸結に達する。吾人が認識の眞偽を識別するに當つては、思惟必然又は直證感情に訴ふる外はない。然し思惟必然なるが故に眞理なるに非て、眞理な

るが故に思惟必然である、直證を以つて認知せらるるが故に客觀的なるに非て、客觀的なるが故に直證を以つて明覺するを得るのである。今若し *Ioh. Denke* や先驗統覺作用を以つてアプリアリの根源とせんか、之れ思惟必然や直證を以つて直ちに眞理其者の本質に擬するものである。即ち之れ眞理の絶對性を心理的必然に基かしむるもの其結果は相對論心理主義に墮するばかりである。一言にして云へば先驗統覺作用や意識一般を説く限り批評哲學の基礎は心理學にあると見る外はない。之れカントに内在する一大誤謬である。而して之れが又フヒテ以下の唯心論者を迷路に導ける最初の機因となつて居るのである。(Herbart, S. W., I, S. 70f. 190f, 256 ff, III, S. 118)。理性批判は心理學に基くと云へる點を捉へてリールはヘルバルトがカントの先驗的方法の眞義を逸したることを難じて居るけれども、ヘルバルトを心理主義者と見て非難の的とする如きは、全然見當違の妄評と云ふを憚らなす。(Riehl, *Der Philo-sophische Kritizismus* I, 2 A, 1903, S. 384ff)。彼の實在論的解釋よりもヘルバルトの方が遙に深く先驗的方法の眞髓を掴んで居るのである。

如何なる意味に於ても主觀や作用を排斥し去つたヘルバルトの純粹客觀主義に立つて今一度アプリアリの世界を見る。其性質の嚴密となるに伴つて其領域も俄

然として一大擴張するを發見するのである。對象界が眞理の世界と相即しない、眞理は單に對象界の一部分に過ぎぬことになつて來る。之れ普遍必然性を客觀的に徹底せしむることより來る自然の歸結である。カントの立場を守る限りは妥當界は如何に擴大されても依然として眞僞の絶對的標準となり得るものでなくてはならぬ。然るに一度主觀一般作用一般を妥當界より追放する時は、普遍必然なる客觀的者は、勿論其中に眞理自體の實存を許せども、其外に尙多くのものを包擁することとなるのである。何となれば苟しくも吾人の思念し思惟し表現し得る當體は、夫れが何等かの意味を持つて、たとひ不合理にても背理にても、久遠にして必然の實存性を確保するからである。不合理は不合理のまゝ、背理は背理のまゝ、誤謬は誤謬のまゝ、超時間的超人間的に其意味の自同性を保持する。否一層徹底して言へば、純粹客觀的妥當説の論理的歸結は、眞僞とか合理不合理の差別相を以つて主觀の對象界を攪亂するより生ずる Künstlichkeit und Zerstücklung に過ぎず、die gegenständliche Urregion は *Uebergangsähnlichkeit od. Gegensatzlosigkeit von Wahrheit und Wahrheitswidrigkeit* ではなくてはならぬと説かねばならぬに至るであらう(Lask, Die Lehre vom Urteil. 1912 S. 88ff.)。ヘルトが *Entscheidung einer Frage* としての判断(眞理自體の前に、主辭と賓辭との單な

る Relation としての判断を説けるは、よく自己の客觀主義に忠なるものと言ふことが出来よう。單なる主賓の關係としての判断とは即ちボルツァノの命題自體に相當するもの、主觀的妥當説に見ることの出来ない一特産物である。ロツツェは斯る判断自體や命題自體を妥當界に許容しなかつた。此意味に於てロツツェは忠實なるカント學徒であり、ヘルバルトは背教者である。然し彼の學徒も此の背教者も共に *Kant's Verstand*, heisst über ihn hinausgehen と云ふ批評的見地に立つものなることを看却してはならぬ。